

氏 名	すぎたに あけみ 杉谷 朱美
学 位	博士（芸術学）
学 位 記 番 号	博（芸）甲 第24号
学位授与年月日	平成24年3月17日
学位授与の要件	学位規程第3条第3項該当
論 文 題 目 名	現代日本の学校教育における 茶道について
審 査 委 員	主査 倉澤 行洋 副査 Horst Siegfried Henneman 同 大村 皓一

一、論文内容の要旨

本論文は「現代日本の学校教育における茶道について」と題されているが、論者の主たる意図は、現代日本の学校教育における茶道を客観的・对象的に観察してその状況を叙述する、というよりは、長年にわたって学校教育の中で茶道を学び、またこれを教授してきた体験に照らして、また現に学校教育の中で茶道教授に携っている者として、現代日本の学校教育における茶道教育にいかなる意義があるのか、また、いかなる意義をあらしめるべきであるかを解明するところにある。

現代日本においては一般に、茶道の修行は、点前や道具の飾り方の決まった形、つまり「型」を学ぶことが中心になっている。そして茶道文化は、「日常茶飯事」ということばがいみじくも示している如く、人の日常生活に密接している（そこに茶道文化を他の文化と隔てる大きな特色がある）。そのため茶道の教授は、「日常生活を型として学ぶ」ということになる場合が多い（茶道教授が礼儀作法教授の替りに行われることのあるのはこのためである）。

ところで、千利休の言行を記録した書と伝えられ、茶道を学ぶ者のバイブルともいわれている『南方録』に、利休の言として、小座敷の茶の湯は、第一、仏法をもつて、修行、得道することなり。

とある。（この文の「仏法をもつて修行」は往々、仏法を手段として、あるいは仏法にのっとって修行する、といった意味に解されているが、それは誤りであって、「仏法をもつて修行する」は、「仏法を修行する」、という意味である。「和をもつて貴しとなす」が、「和を貴しとする」、と同義であると同様である）。

小座敷の茶の湯の第一段階は、仏法を修行し、得道することである。

というのである。『南方録』には、茶の湯でのもろもろの行いは「みな仏祖の行いのあとを学ぶ」ことだともある。

さて、小座敷の茶の湯（ここではわび茶の意味）が、第一に、「仏法を修行することである」ということと、茶道の修行が「日常生活を型として学ぶ」という趣が強いということとを重ね合せて考える時、おのずから浮かび上ってくるのは、仏教教団特に禅林での「清規しんぎ」である。

清規とは禅林で修行者に課せられる、日常生活の万般にわたる規範であって、それは起居、食事、用便などに至るまで細々とした規定を含む。著名なものに、唐代の『百丈清規』、宋代の『禪苑清規』、日本の道元の『永平清規』などがある。

論者は、「日常生活を型として学ぶ」という時の型は、一種の規範であり、したがってそれは禅林の清規と根本の性格を一にすると考え、茶道修行のを中心に考えることに先立って、禅林清規の研究を行った。

この研究を通して論者は、禅林での清規は、はじめは修行者を拘束する規範であるが日々に清規を生きる修行を重ねることによって、清規は外からその人を束縛する規範ではなくなつて、その人の内におのずからにじみ出るものとなる、ことを指摘する。茶道を「型として学ぶ」ということも、究極はここに至るのでなければならぬと論者は考えるのである。

このような禅林で清規を守ることと同一の趣意で、学校における茶道教育を行った人として、論者は奥田正造を挙げる。奥田は大正から昭和にかけて成蹊女学校校長として、茶道を中心とする学校教育を実践した、すぐれた茶道教育者である。

さて、本論文は、本文全六章と序説、そして中国の清規の若干を紹介する附録とより成る。以下に目次と（論者自身による）各章の要旨とを掲げる。

目次

研究の動機

研究の目的と研究方法

第一章 清規の成立と背景

第一節 釈尊の教え

第二節 仏教修行の原初形態

第三節 小乗から大乘仏教へ

第四節 戒の中国的変容

第五節 叢林の清規成立の背景

第二章 百丈清規における行

第一節 百丈清規

第二節 受戒

- 第三節 法の伝灯
- 第四節 日常生活の清規
- 第五節 動中の工夫
- 第三章 道元の行
 - 第一節 老典座との出会い
 - 第二節 「行持」
 - 第三節 道元の清規
- 第四章 日常生活の行いを型として学ぶ
 - 第一節 普段の日常
 - 第二節 型が示すもの
 - 第三節 型を手掛かりに学ぶこと
 - 第四節 発心
 - 第五節 師と弟子
- 第五章 奥田正造の茶道教育
 - 第一節 奥田正造について
 - 第二節 奥田・中村が茶道教育に求めたもの
 - 第三節 奥田正造の茶道教育における実践
 - 第四節 内発的精神
 - 第五節 師と弟子
- 第六章 現代の学校教育における茶道について
 - 第一節 心(感じる心)・智慧(利く眼)・身体(はたらく身体)
 - 第二節 総合学習を考える
 - 第三節 茶道教育について

各章の要旨

第一章 清規の成立とその背景

では仏法を修行して無相の自己が開かれていく稽古はどうであるべきか。それを「覺書」では、「仏祖の行いのあとを学ぶ」と述べられている。それはどういふことか。禅僧の行いを示しているのは清規であることから、まず清規とはどういう意味を持つのかを見ていくことにした。第一章では清規の本となっている、百丈清規についてその背景を見ていくことになる。釈尊は人間の苦しみから脱する道を求めて修行された。その釈尊の教えは人は生まれた時から、縁起によって存在していることを説き、またその縁起によって苦しんでいる。その苦しみを脱する法として、八正道を説いている。この教え（人間存在の本質）を理解し、戒を護り、心が統一されている人は憂いが除かれていると、戒定慧の三学による修行を抛り所として示している。禅の初祖は達磨とされる。中国に入った仏教は上流階級、特権階級で広まっていたが、それは經典の研究に向いている教条主義の者、坐禅によつて涅槃に入つていくことを求める寂靜主義の者が多かった。または仏塔を建てることに一生懸命になるといふように、何処か自分の行として取り組むことではなかったように理解する。達磨は仏の教えを自分の身をもつて体得することを説き、その上で、その人間のおかれていくことに修行の方向が向かっていたことを考えると、大きな転換であることを説いた。これは、それまでは自分の受けている業を取り除いていくことに修行の方向が向かっていたことを考えると、大きな転換であったと考える。しかし世の中は、その後もまだ座ることによつて、自分の淨い心を見つめていく方に向いていたようである。

六祖慧能の「本来無一物」は、寂靜的であった人への指摘のように思われる。坐禅をして心を塵ひとつないようにとかいう、心という実体のあるものはないのである。彼は「六祖壇經」に自らが悟つて修行することを説いた。口ばかりで善いことを言つて心の内はそうでなければむなしいだけだと説いている。実際の人々には理論ばかりや、口ばかりで、実際の行いが戒めある人の行いがなされていなかったとこゝろに生まれた言葉であろう。

その後の馬祖道一は「平常心是道」と説いた。

「衆に示して曰く、道は修するを用いず。但し汚染すること莫れ。何をか汚染と為す。但し生死の心ありて、造作し、趣向せば、みな是

汚染なり。もし直ちにその道を会せんと欲せば、平常心是道なり。何をか平常心と謂う。造作無く、取捨無く、凡無く聖無し。經に曰く、凡夫行に非ず、聖賢行にあらず、是菩薩行也。只只今の行住坐臥、応機接物、尽くこれ道なり。」(『馬祖語録』)

今只今の行住坐臥、目の前のことに接し、その機に応じていくことが修行であると、今の目の前に行いは戒が護られていなくなったのである。とを説いている。しかしこれではまだ教えてはかからないのである。実際の菩薩集団の修行者たちの行いは戒が護られていなかった。ということより、当時道場でなされていた行いは、インドの小乗の時に生まれた戒律であり、中国の人々には合わないところも多かった。また菩薩集団は自誓戒とされ、以前の戒律は既に無意味化し、彼らの日々の行いはそれぞれが好き勝手に行なっていたように、道場の修行生活は乱れていたのである。そこに示されたのが、清規である。それは集団生活の規範でもあるが、百丈禪師は、仏の生き方、戒めある生き方を、具体的に清規として示したのである。清規を手本として、日常生活の行いを護ることを求めたのである。

第二章 百丈清規における行

その清規の内容を見れば、まず受戒が求められた。自分が戒めを護ることを誓うのである。ここではどこまでも自らの己事究明が中心となった。「法をよりどころとして」と釈尊が示していることから、住持が釈尊からの法を伝える活仏として、彼を中心に修行生活は行われた。僧は僧堂に単という狭い自分の場所をもち、そこで、坐禅、食事、睡眠を皆とともに行うのである。僧堂は修行の場であり、ここで食事、睡眠もすることは、人間のもつとも根本的に行いであり、究めて日常の行いをも行として行っていることである。そしてその行いの一挙手一投足まで細かく決められている。それを見ると集団で生活するために、生活がスムーズにいくようにという目的もあるように思える。それは礼儀を重んじる中国人らしく、威儀的側面が強いようにも思える。また修行は勿論坐禅が中心であるが、「普請法」が示され、労働作務もまた修行として示されている。食事をするなどの日常の行いも、また作務も坐禅と同じに行として示されているのである。すなわち生活そのものが行という形が生まれたと言える。僧達の自らの己事究明を導くのは、住持であった。住持は共に僧堂での生活、作務をし、説法と問答商量を行った。住持は、法を身を以て伝えると同時に、その法が僧達それぞれのものであるとして受け取り直しができることを見守ることが重要な役目であった。

第三章 道元の行

しかし中国では百丈禪師の意向は続かなかったのである。国の加護を受けるようになると、彼らの目的は他に移ってしまう。修行の始め

はまずその人の修行せんとする意志である。それがなくなれば、清規も形だけになり無意味となるのである。道元はそのことを中国でも、また留学から戻ってすぐに身を寄せた建仁寺においても眼にしたのである。日本にはじめて禅の道場を創るに当たり、「典座教訓」を示し、永平寺を創立した折にもいくつかの清規を撰述した。それが「永平清規」であり、また道元の著書『正法眼蔵』にも道場での役目、心得、作法を示している。それほど道元は清規を大事にした。そこには中国での老典座での体験が大きく影響している。道元の疑問は、人は皆仏性があるというのに、何故修行をするのかということであった。

道元は「修証は無きにあらず、汚染するには即ち得ず」ということを常に示している。修行は諸祖の行われてきた行いを身心共に同じように行うことである。そしてそこに諸祖から行われてきた道が通達する。自分の修行もそこに実現しているのである。何か目的をもって修行するということは、そこで既に汚染されているのである。本来の面目などといって何かそこに素晴らしいものがあるような言葉を使うこともまた法縛であると、文字や言葉が概念として何か実体があるようになってしまふことを強く否定している。それだけに道元の語りようはどこかあちらからこちらからと、繰り返して説いているように思われる。諸祖は皆、仏祖の行われてきた行を同じように続けられてきた。その行の持続があることを説くのである。

「仏祖の大道、かならず無上の行持あり、道環して断絶せず、発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙あらず、行持道環なり。このゆえに、みずからの強意にあらず、他の強意にあらず、不曾染汚（曾て染汚せず）の行持なり。この行持の功德、われを委任す。その宗旨は、わが行持、すなわち十万の地漫天みなその功德をかうぶる。他もしらず、われもしらずといへども、しかあるなり。このゆえに諸仏諸祖の行持によりて、われらが行見成し、われらが大道通達するなり。われらが行持によりて、諸仏の大道通達するなり。」『正法眼蔵』

道元は人の存在が縁起、はたらきによって存在しているという法の教えの上に説かれていることが理解できると思う。また「縁起は行持なり」とも述べている。自分の今の係りは自分の行いによって生まれたことである。ということは自分の今の行いが自分の係りを創っていることであり、それは即ち生きることとも言えるのである。そして、今只今の行いが諸祖の功德を受け、また自分の行いによって諸祖の行持が顕れることだと考えれば、今の行いが大事になる。

「いま仏祖の大道を行持せんには、大隠小隠を論ずることなく、聡明鈍癡をいふことなかれ。ただながく名利をなげすてて、万縁に繫縛せらるることなかれ。光陰をすごさず、頭燃をはらふべし。大悟をまつことなかれ。大悟は家常の茶飯なり。」『正法眼蔵』

坐禅ははからいのない姿であるが、その他の日常生活は違うのではない。行の段階は問題ではない。皆自分の日々の行いもおろそかにせず仏祖の生き方をならうのである。「典座教訓」は、当時日本においては、食事の世話をすることは下人のする仕事と考えられていた。

その作法も行儀のよいものではなかったのである。それだけにまず「典座教訓」を示したと思われる。それは百丈清規の意向を本にしたものである。典座の役が重要な行であることを示し、その細かい仕事についてそのひとつひとつについて示し、その心構えを示している。その上にまた「心の用い方」を示し、最後に「三つの心構え」として、喜ぶ心、老婆心、大心を説いているのである。この心構えが全体を通して、細かい行いのひとつひとつに対して言われていることであり、これだけしつこく説かれているところに道元の強い想いが伝わっている。その心の用い方は「凡眼を以て観ること莫れ、凡情を以て念うこと莫れ」と説き、ひとつひとつの行いをゆるがせにしないことを説いている。諸祖の行いを心身ともに同じように行うことは身を以て現さなくてはならないが、心をかけた行いでなくてはならないことも道元は強調しているのである。でなければその行いは形ばかりとなりむなしものとなるからである。今の自分の行いが生きることであれば、そのひとつひとつの行いをゆるがせにはできないのである。

第四章 日常生活の行いを型として学ぶこと

ここまで見てくると「仏祖の行いのあとを学ぶ」ということは、仏祖の行持を同じように行うことであり、それは生き方をならうことであつた。その生き方が、清規として具体的な行いに示されたのである。その行いを同じように行うこと、いわばひとつの日常の生活様式をならうことである。そのならうべき様式とは、道元が「正法眼蔵」に取り上げていた「洗淨」について見れば、

「(大比丘三千威儀經に曰く、淨身とは、大小便を洗い、十指の爪をきるなり)しかあれば、身心これ不染汚なれども、淨身の法あり、淨心の法あり。ただ身心をきよむるにあらず、国土、樹下をもきよむるなり」(『正法眼蔵』「洗淨」)

道元は細かく便所での行いを示している。汚れているから浄めるといふ所作をするのではないのである。どこまでも心身が汚染されていないところで洗淨するのが洗淨本来の威儀である。その行為は国土も浄めることと言ふ。たかが便所のことにと思ふのが私たちであるが、といつて誰もこの行いがなくては生きることができないのである。こういうところまでも、諸祖の行いと同じように行うのである。それは仏祖の行いである。はからいのない行いなのである。そしてその自らの行いが、国土までも樹下までも浄めることになるのである。食事、睡眠、洗淨と、それは人間の生きるというもつとも根源的なところの行いであり、また私たちがあまりに日常的で当たり前になっている行いである。日常生活のこの行いを仏祖と同じように行うのである。これは人間存在の本質に目を向けた生きる姿である。そしてその自分の行いがまわりにもはたらいていくのである。自己の係りを創りだしているのである。自分の人生を一步一步創りだしているということである。

そしてその行い、儀式をならうということはどういうことか。

「水をもて身をきよむるにあらず、仏法によりて仏法を保任するに、この儀あり、これを洗淨と称す。仏祖の一身心をしたしくして正伝するなり、仏祖の一句子をちかく見聞するなり、仏祖の一光明をあきらかに住持するなり」(『正法眼蔵』「洗淨」)

師のそばにいて、諸祖と同じように行われてきた行いを、身も心も同じように行っていく間に、それまでの諸祖の行持に支えられて、その仏法が自分の心身にあらかになつていくのである。師の見守りの中で、弟子は自分に向き合っていく。

ここで今、心身医学の中で、行動療法の研究が進められている。今までは過去の患者の心の問題を分析し、その原因を見つけ除去していくものだった。しかし実際の病では心だけでなくでは人の病に向き合うことは難しいことが明らかとなった。行動療法とは今ここで行われている行いを見ることから、患者の生き方の歪みを、今の行動によって修正しようというものである。そのなかのひとつである臨床動作法を始めた成瀬悟策によれば、私たちの体は、「体の持ち主である主体が自体を動かそうとして、それなりに動かすための努力をしているからこそ動くのである。その努力こそ心の活動であり、心理現象そのものである。」述べている。そして忙しく生きてきた人の、偏ったままがつちりと出来上がっている動作の在り方を変えるには、その基となつている当人の日常の態度、物の見方、生活の感じ方、体験の仕方、他者への対応の仕方などを自分で変化させていかなければ、変わらないという。まっすぐ立つとか座るとかの動作課題を与える。自分では生活することに慣れ過ぎて、自分の体がどう動いているとか無関心である。動作課題を与えられて、それに向かう態度も人によっていろいろである。そんなの無理とすぐ投げ出す人、このくらいと入っていく人、そして動かそうとしてその体の部位を意識し、入れる力の感じ、それによつて動かされ、動いていく自体の感じ、途中で生じる抵抗の感じ、それを修正する自分の努力の感じ、やれやれと成功の感じと自体と自分との間のいきいきとした交互作用を実感する。こういう過程の中で、自体を動かす自己を実感していく。そして実感しながら、検証し又繰り返ししてみる。これは与えられた動作をする時の人の意識と自体の交互作用である。この体験を終えた人の物事の感じ方、生き方、人間関係の在り方が変化してくるといふ。

同じように日常生活のならうべき行いを行おうとすることは、おそらくその人の中でこのような自分との向き合いがなされるのであろう。道元が、そのひとつひとつの行いを眼精を以てゆるがせにせずに行うことを説いたのは、そのひとつひとつに意識を向けていくことであつたと考える。そして仏祖の行いという手本に照らしつつ、自然に自分に向き合っていくことだと考える。そしてそれはまた自己を省みることであり、池見の言う自分の心の内にある命の座、本能、感情の座のはらたきが目覚め、見失わずに自分に向き合うことであり、それは他者への眼が開かれることでもあつた。こうして自らの行いによつて、ひとつひとつに向き合い、実感を伴った納得の体験ができていくこ

とであった。

第五章 奥田正造の茶道教育

日常生活の行いを型として学ぶことについて考えてきたところで、あらためて学校における茶道教育について考えていく。成蹊女学校の創立者中村春二は家庭における母親の無意識の教育の大きさを感じ、女子教育に臨んだ。彼は子供たちの心の奥に入りこんだ、人間の根本教育のために、奥田正造の茶道教育に委ねたのである。奥田は『南方録』を浄写し、特に「覚書」の教えを本に『茶味』を著し、茶道の実践教育を進めている。彼は茶道の、水を汲み、炭をつぐというようなささやかなことにも心の奥の鏡にかけて、稽古をし、心身を練り、次第に自己に眼が開けば、無一物の境にたち、心はたらきにも気づき、一物に対しても感謝を覚えてくる、そんな真の生活を創る人、またどんなことがあっても道を切り開いていく道器となる人を育てることを求めたのである。中村、奥田は学生たちの学校生活を少欲生活に基本をおいた。奥田はまず心の眼を開くように、かすかなる感じを大事にした。人が動く風をも感じるくらいの小室、「不言庵」にて稽古をした。そして、特に音に注意を向け、自分たちの露地を歩く音に気をつけさせるとか、他の人の歩く音を別室にいて聞かせるなど、何かにつけ音に心をかけさせている。点前も最も単純な薄茶の点前だけをさせたのである。かすかなる感じは私たちの感じる心を引き出す。わび茶の簡素であることは、眼耳鼻舌身意の六根の微妙な活動を引きだし、感じる心を引き出すことでもあることを、改めて考えさせられる。奥田の教えや、その実践を見てみると、道元と重なっていく。奥田は道元の説いた「凡眼を以て観ること莫れ・・・」の教えを点前の根本精神として、ひとつひとつゆるがせにせず稽古することをさせているのである。実際に「正法眼蔵」や「典座教訓」なども一緒に読み、その教えを語るとともに、実際の実践においても細かくその行いに心をかけるところなど、喩話などをしながら実行させている。自己の体をいかに使うかも点前に於いて、注意している。そして稽古によって向かうべきところを自己の姿として示している。腹筋を鍛えるのに雑巾がけが大事だと、生徒に詳しく、どのようなことに注意してするかを細かく示しながら、毎日一緒に掃除をしているのである。露地、打ち水の趣は、亭主のはたらき工夫によって生み出すものであることを教え、いろいろな掃除に関する逸話も取り上げている。毎日の掃除のうちにその趣をいかに出していくのか考える学習をさせていたと考える。四年になると、一汁一菜の稽古である。毎週交代で亭主、客になり、料理し、もてなし、頂くといいことをさせたのである。毎日の稽古の準備でも同じであるが、ガス、水道を使わせていない。便利なものを使うのは簡単だが、それに慣れるとないことに不満を持つ。しかし不便に慣れていけば、無い中に工夫をしていく。設備を働かす根底となる心の働きを訓練するにはむしろ設備は乏しい方が、そのはたらきを増すというのが奥田の姿勢であった。そして、仕事を見出す眼、

それを処理する腕を養うことが逆に、労苦を忘れて事に当たれるというのである。それが最終年である四年生の稽古だった。細かい所作のひとつひとつをゆるがせにしない稽古を、奥田が傍らにいて、注意すべきこと、心構え、逸話などを教えつつさせている。中村が当時の教育論や心構えばかりを口で言っているだけで、教師も生徒も実地の練習がないことを批判していた。中村、奥田は教師も生徒も内からわいてくる自発的精神を育て、互いが共鳴していく、すなわち心の奥に触れていく教育を目指したのである。成蹊学校の教師はいつも生徒たちとともにあったのである。

第六章 現代の学校教育における茶道について

日常生活の行いを型として学ぶことは、その型をならっていく、即ち行いを真似ていく間に、自らに向き合って検証し、ならい、習熟していく体験を重ねていくことであった。自分の生き方を自らの体験をもって、見直していく道のりを通って、自己の生き方として身に付けていくことであった。毎日の日々の当たり前のことこそ大事であった。道元が典座の行いは、仏の皮肉骨髄をならっていく行為と述べている。自らがならうべき型を自分のものとし、さらには自己の姿を形成していくことであった。その姿は私たち人間存在の本質を自覚し、自己を省み、ささやかなことにも実意を以て臨み、簡素な生活にあっても、何か事にあたっては自らはたらきを工夫をし、他者へ感謝し、どんな時にも道を切り開いていく、生きていることを喜べるような生き方であった。

今のエリート社員の中には、無力感を感じている若者が多いと言われる。人間である、三つの脳のはたらきがバランスよく保たれて、自分の心の奥の心に心開いた自己を育てる。それは、また行いを手掛かりにして、心と体の用い方をひとつひとつならっていく体験を重ねていく。そして実感を持った納得をしていく体験を重ねて、確かな自己への信頼を育て、これからの道を開いていく、まずは抛り所を育てる場が茶道教育の場ではないだろうか。それが体験学習と言われるものと考える。そのためには、奥田のようにはいかなくても、学校教育の現場で茶道の時間を受け持つ者が、それぞれの学校の現場に応じて、自分の茶道をより深く受け止め、考え、授業の工夫はたらきを求めていくことが必要であると考ええる。池見によれば、日本の家庭には、人間存在の本質を自覚した生き方をする茶道文化が浸透していたと言っている。しかし今それは家庭にあるだろうか。新しい知識を伝える所であった学校に求められる役割は、どこでも新しい知識や情報を得られる今、変化してきているように思われる。逆に家庭で途切れつつある生活文化を伝える場として、学校教育における茶道の場が生かされていく工夫もあってよいのではないだろうか。

二、本論文の評価さるべき特色

① 茶道と禅とは根底において一つであるとか、「茶禅一味」であるとか言われ出して久しい。しかしそれを具体的な修行の場において考え、型を学び行う茶道修行と、清規を学び行う禅林の修行とが、根底において通じていることを具体的に指摘したのは、おそらく本論文をもって嚆矢とする。

② 従来の茶道研究者たちにもよく知られていた書物であるにも拘わらず、その難解さの故に敬遠されがちであった、唐の「百丈清規」（いったん散逸するが宋代「勅修百丈清規」としてよみかえる）、宋の「禅苑清規」、道元の「永平清規」などを重要資料として取り上げたのも、本論文の評価さるべき点の一つである。

③ 論者は禅林の生活における清規の意味を深く考えることによつて、禅林の清規を単なる規範としてでなく、深くそれを生きることが仏（真実の自己）になることであるとの結論に達した。そして論者は、これを茶道修行に投影させることによつて、日常生活の行いを型として学ぶ茶道は、清規を生きる禅林の生活と相通じている、すなわち両者はともに人間の自己形成の道であることを明示した。

④ 近年とみに声価の高い奥田正造の茶道教育を、禅林における修行の考察と関連させることによつて、これに新たな光を当てた。論者は本論文の最後を次の一文でしめくくる。

奥田も又茶道という伝統文化を、茶道に対する深い洞察をもつて、自らが中心となつて行つたのである。彼は先人の行実を一向問取し、清規を本にそれに徹していった。長い伝統で培われてきたいなみを、身をもつて伝えたのである。ひとつひとつの行いをゆるがせにしないこと、それは自らの行いを手掛かりに、自らの内に触れていく工夫であつた。これを繰り返し練習させ、体験させた。こうして感じる心、利く眼、働く身体を育てたのである。それは人間の根底を見つめた教育であり、人間としての自己の心の眼を開き、どんな困難な中にあつても、それを乗り越え、新たな創造性をもつて道を切り開いていく人間を育てることを求めた教育であつた。

三、残された課題

論者は「自分にとって茶道は、わび茶をもって生きる姿である」と言う。また『南方録』の「小座敷の茶の湯は、第一、仏法をもって修行、得道すること」における「小座敷の茶の湯」は「わび茶」にほかならぬとする。しかし「わび茶」とはそもそも何であるかは、本論文中では必しも明確ではない。小座敷の茶であっても「わび茶」でないことがあるし、逆に広座敷の茶が「わび茶」であることもあり得る。これを明確にしてほしい。

論者は本論文を書くことを通して、茶道教育のあり方について深く確かな考え方を獲得した。その成果は、実際の学校茶道教育の中にいかに生きたか。いつか報告してほしいと思う。

四、審査結果の要旨

本委員会は、以上の如き観点から、本論文を、着想の獨創性、叙述の仕方、構成の整合性、などにわたって慎重に審査した結果、全員の一致をもって、上記学位申請者に博士（芸術学）の学位を授与するのが妥当であるとの結論に達した。